



ラヴァル大学との交流実績～5年間の交流と実績

京都市立大学 副学長 生命環境科学研究科 教授 田中和博

写真左) 左から、ブリエール学長、ケベック州政府在日事務所エティエ代表(当時)、竹葉学長(当時) 2010年5月7日 本学にて



写真右) 2013年10月6日 モデルフォレストDAY 森林保全シンポジウム 本学にて



目次

- 1 ラヴァル大学との交流実績
- 2 ラヴァル大学留学レポート
- 3 海外研究機関との共同研究
- 4 英文契約書との格闘
- 5 国際交流協定校との交流便り

京都府とカナダのケベック州は2008年4月に交流協定を締結しており、そのご縁で、京都市立大学とケベック州のラヴァル(Laval)大学が交流を始めることになった。本学は約120年の歴史を持つ中規模総合大学、かたやラヴァル大学は北アメリカで最初のフランス語による教育機関として1663年に創立され約350年の歴史を持つ大規模総合大学である。それぞれ総合大学であるので、どの分野から交流を始めようかとなったときに選ばれたのが森林科学の分野であった。それには次のような理由があった。1992年の地球サミットの時にカナダはモデルフォレスト運動を提案した。モデルフォレスト運動とは、人と森との関係を見直し、地域ぐるみで持続的に森林を管理・保全していこうという活動であり、その実証実験地がモデルフォレストである。モデルフォレストは、世界に約40箇所あり、もちろん、ケベック州にもあるが、日本には唯一、京都にあるのみである。京都府が先頭に立って、日本で最初のモデルフォレスト運動を京都府内で展開している。そして、京都府とケベック州とはモデルフォレスト運動を通じた交流が始まっていた。そうした背景もあって、まず、森林科学の分野から交流が始まった次第である。ちなみに、森林科学の教育組織は本学では学科であるが、ラヴァル大学では学部である。

2009年3月にラヴァル大学のボールガール学部長(林産学)が来日され、9日に本学生命環境科学研究科とラヴァル大学森林・ジオマティックス学部との間で協定が締結された。2010年5月にはラヴァル大学学長らが来日され、7日に大学間協定が締結された。その日のレセプションでは、ラヴァル大学のブリエール学長からサプライズのプレゼントが発表された。それは、本学の博士前期課程修了生1名をラヴァル大学博士後期課程の大学院生として授業料免除かつ奨学生として受け入れるという大変有り難

いお話であった。この制度に応募して留学生になったのが川口敏典君である。

これまでの交流実績は次の通りである。○2009年11月ブッティリエ教授(森林政策学)、ヴィンセント教授(森林生態学)表敬訪問、○2010年3月ル・プレスト教授(森林政策学)セミナー『森林の生物多様性』、○2010年11月ル・プレスト教授、セミナー『生物多様性条約の課題』、マッキンタイア教授(森林生態学)生物多様性条約COP10記念学術交流事業シンポジウム『森が育む生物多様性』、○2011年10月川口敏典君がラヴァル大学博士後期課程へ進学、田中和博がラヴァル大学で招待講演、○2012年3月ボールガール学部長、表敬訪問、○2012年6月川口敏典君、一時帰国報告会、○2013年10月ジェリナ教授(森林政策学)モデルフォレストDAY森林保全シンポジウム、○2014年11月(予定)ジェリナ教授、国際京都学シンポジウム『都市と農村のロハスな関係』基調報告。なお、本国際交流の責任教員は森林科学科の高原光教授、池田武文教授、長島啓子助教、そして私の4名である。

ラヴァル大学とは、これまで教員間の交流として相互訪問等をしてきたが、次のステップとして、両大学の森林科学科の学生・院生を対象にして、京都府とケベック州の様々な森林・木材利用・庭園・景観(ランドスケープ)を実際に体験させる教育プログラムの開発を目指している。2015年5月にはラヴァル大学からの修学旅行生を受け入れる計画が現在進みつつあり、近い将来には本学森林科学科学生のラヴァル大学訪問とケベック州の森林視察が実現できればと考えている。

タイトル決定!

国際交流ニュースレターのタイトルは文学部3回生 指宿 生君の考えた

Flyin' to the Sky

と決定しました。府大生が大空高く羽ばたく様子が思い浮かびます。ご協力ありがとうございました。

ラヴァル大学留学レポート ～協定校に留学してみて～

体験談

ラヴァル大学博士課程 川口敏典
2011年生命環境科学研究科 博士前期課程修了



この留学の話を聞いたのが大学院2回生の春で、悩みもあったが、「これを逃せば2度目は無い。」と思い、研究留学に飛び込むことに決めた。研究留学の目的は学位取得のため、そして哺乳類（主にカンジキウサギ）の冬季の生態についての研究するため、今は4年目である。大学外では、ホッケーやハイキングなどをして過ごしたり、フランス語学校に通っている。たまにパーティーがあるでの、日本人ということでお寿司を作ることもよくある。野外調査だが、冬の気温が時折零下30度まで下がるのでなかなかきつい。やはり、現地人もこの寒さは嫌みたいである。厳しい調査だが、時折遭遇するリスやヘラジカ、小鳥たちに癒されながら、楽しくこなしている。

大学は全体的に研究に専念しやすい環境だと感じた。一つは修士以上の学生は生活費をもらいながら研究しているので、経済的な不安も少ないからだ。私にとってもこの点がものすごくありがたい、アルバイトをしなくてもいいので。さらに、データ処理、英文校正などの研究サポートも受けやすい。博士課程の学生の人数が多く、同じような問題で議論する相手が多いのも一つの魅力だと思う。恵まれている環境だが、必須の口頭試験に連続2回落ちて、生活費を打ち切られ、事実上追い出された学生もいた。それでも頑張れば通る試験なので、海外の大学院は研究に専念するには絶好の場所だと思う。

現在のところ、最も困難だったことは専門知識と研究計画に関する必須試験。これが最初の一年半以内に2回あった。この試験は3人の教授による口頭試験で一時間半ほどある。目的は学生を質問で追い込んで、どこに限界（知識・考えの深さにおいて）があるかを知ることだが、ひどい言い方をすれば、これは一種の拷問だった。試験前は自分で自分を追い込む、つまりひたすら自問自答をして過ごした。試験後に試験官から意見が出されるので、自分の弱点を知り、考え方を直す機会としては必要だったと思う。

やはり海外留学は「価値観の選択肢を増やす場所」に最適だと思う。行動様式の違い、重点が置かれる研究の違いから、別の価値観に気づくこともあった。行

動様式の違いからの例では、パーティー・飲み会の出席者が常に自分のパートナーを連れきて、紹介する。日本だとほとんど見られないから、なぜ違うのかと考え、その行動には何か意味があるのかと考えた。人脈が広がるという点でこの行動に一つの意味があるように思えた。このように違いに触れることで、別の選択肢ができることは海外留学の一つの大きな意味だと思う。新しい選択肢も加えて、自分なりの価値観を見つけるのが、今の自分の課題である。

研究留学を目指す 府大生へのアドバイス

物事について深く思考すること、普段使っている言葉を自分なりに定義することが重要だと思う。これは私があらゆる場面で私がどこまで考えているかを問われていたように感じたので。例えば、「動物の保全が成功した。」という文章。ありえる質問は「保全の定義は？」「君なら成功したかしないかをどう決める？」など。自分の中で定義が不明確、考えの深さが足りないために、このような質問への答えに詰ることもあったので、この機会にじっくり考えてほしい。語学それ自体も大切ですが、それだけでは足りませんでした。この深く考える作業は口答試験、ひいては3年以上に及ぶ研究生活を乗り切る上で重要だと思う。